前世で辛い思いをしたので、神様が謝罪に来ました 6

ALPHA LIGHT

初昔茶ノ介
Hatsumukashi Chanosuke

アルファライト文庫

プレシア
王都エルトのお姫様。
膨大な魔力と
回復魔法の
才能を持つ。
ティルナ
おっとりしているけど
とても優秀な、
回復魔術師。
サキとは浅からぬ縁が
あるようで……？
学園のお友達
アニエ
オージェ
フラン
ミシャ
レオン
強くて頼れる
サキの先輩。
クロード公爵家の
次男。
ネル
サキのお付きの猫。
最近は人間の姿に
なったりもする。
サキをお世話
するのが好き。
サキ
不幸ばかりの前世を
神様に謝罪され、
幼女として異世界転生した。
最近は、お店作りや
魔法の研究で
大忙し！
キール
貧民街に住んでいた
孤児だったが、
妹であるアリスとともに
サキに拾われる。
器用で、妹思い。
アリス
キールの妹。魔力を
ため込み過ぎる体質に、
長年悩まされていた。
兄を誰よりも
信頼している。
Characters
登場人物紹介

私――雨宮咲の不幸続きの人生は、落雷に打たれたことにより幕を閉じた……はずだったんだけど、なぜかシャルズという魔法の世界に可愛くて幼い姿で転生することに。

しかもシャルズを管轄する神様、ナーティ様の計らいでたくさんの才能と、頼れる子猫の従魔ネルをもらっちゃった！

こうしてサキ・アメミヤとして第二の人生を送り始めた私が養子として身を寄せたのは、王都エルトにあるアルベルト公爵家だった。

パパとママ――当主のフレル様とその奥さんであるキャロル様、そして二人の子供であるフランとアネットの四人は、私を家族として迎えてくれたんだ。

でも私を受け入れてくれたのは、家族だけじゃない。

魔法を習うために通っている学園では、ブルーム公爵家の一人娘で努力家な赤髪の女の子アニエちゃん、青髪とメガネがトレードマークで、水魔法と洋服作りが得意な女の子ミシャちゃん、おっちょこちょいだけど憎めない金髪の男の子オージェとも仲良くなった。

みんなと一緒だと、魔法の訓練も遊びもすごく楽しいんだ！

遊びと言えば、学園一強いクロード公爵家次男のレオン先輩がこの間、学園の長期休暇を利用して泊まりでのお出かけに行こうって誘ってくれたの。

ちょっとドキドキしながら向かった先は、ギャンブルの街メルブグ。いろいろなゲームができる楽しい街だったんだけど、その裏には貧しい人たちもいる。

私は街で孤児の兄妹――キールとアリスに出会う。
体内に宿す魔力量が多すぎる、魔力異常体質によって死んでしまいそうになっていたアリスを助けた後、私はアルベルト侯爵家の使用人として二人を雇おうと提案した。
というのも、私にはアリスの溢れる魔力を活かしてみんなが幸せになれるアイデアがあるの。
そのアイデアとは、彼女の魔力を原動力にして動く魔道具を作り出し、それらを販売するお店を作ること！
魔力を宿していない魔石――空の魔石を使えば魔力を溜め込むことができるから、車のガソリン代みたいな感じで、お金を払ってアリスの魔力を補給しにきてもらうシステムができればいいなって。そうしたら病弱で自信のないアリスも『人の役に立てるんだ！』って思えるようになるはず。
よーし、勉強も店作りも頑張るぞー！

1　久しぶりのお屋敷

メルブグへのお出かけが終わり、私たちは馬車でアルベルト家へと戻った。

家に到着したのは夕方になる前だった。
「サーキちゃーん！」
私が馬車を降りるや否や、お屋敷から出てきたママが抱きついてきた。
ママの腕の中で窒息しそうになりながら、どうにか声を出す。
「マ、ママ……くるし……」
「だって久しぶりにサキちゃんと会えたんですもの！」
「キャロル様、相変わらずですね」
そう口にしたのは、馬車から降りたレオン先輩。
他の貴族の前ではキリッとしているママだけど、レオン先輩の前では取り繕わない。
公爵家同士は交流が深いから、今さら隠す必要がないってことなんだろう。
でもそんなことより、ママの匂いを嗅いだりアルベルト家を見たりしているうちに、なんだか懐かしい気持ちになってしまった。
ここはもう私の帰る場所なんだって、改めて感じる。
たった数日、家を離れただけなのにね。
そんなことを考えていると、ママは私を解放してから立ち上がって、レオン先輩に言う。
「レオン、今回はありがとう。それに、今後もいろいろ手伝ってくれるみたいね」
お店を開くに当たって、旅先から電話でパパに相談したんだけど……ママも知っている

ようだ。
レオン先輩は、はにかんで言う。
「はい。僕なんかでよければぜひ」
「ふふ、頼りにしているわ。この子、すぐ考えなしに突き進んじゃうところがあるから」
そんなママの聞き捨てならない発言に、私は思わず口を挟む。
「そ、そんなことないもん……」
「いやいや、この旅の途中でも向こう見ずな行動を――」
「ちょっと！　レオン先輩！」
慌てて先輩の口を塞ぐ私。
だけど先輩とママはニヤニヤしてこちらを見てくる。
アリスが人身売買目的で悪徳貴族に攫われた時に、考えなしにすぐに助けに向かおうとして、レオン先輩に止められたんだよね。
他の貴族に手を出したら、自分の家にまで迷惑をかけることになっちゃうからって。
でもあれは、アリスを助けるのに必死だっただけで……あ、そういえば二人を紹介しないと。
「……私の行動についての話はおしまい。そんなことより、紹介したい人がいるの。キール、アリス。出ておいで」

私が呼ぶと、二人は恐る恐る馬車から降りてきた。
そしてぎくしゃくした足取りでママの前まで来ると、頭を下げる。
「は、初めまして……キール・シャンスです」
「妹のアリスです……」
それを見て、ママは目を輝かせる。
「あなたたちが、サキちゃんが発掘した逸材ね！」
じーっと二人を見つめてにっこり笑うと、ママは続ける。
「二人とも今まで大変だったでしょう。これから商人として働いてくれるのよね。さっきも言ったけど、サキちゃんは考える前に動いちゃうタイプだから支えてあげてほしいの」
「い、いえ……そんな……」
「恐れ……多いです……」
キールとアリスが緊張で言葉に詰まっていると、屋敷の扉がバンッと勢いよく開いた。
「お姉さま！　お帰りなさいませー！」
声の主はアネットだ。
こちらへ走ってきて、抱きついてくる。
私は見上げてくるアネットの目を見て言う。
「アネット、ただいま」

「レオン様との旅行はどうでしたの？」
「うん、とっても楽しかったよ。後でお話聞かせてあげるね」
「はいですわ！」
ああ、このアネットの反応も久々な感じがして、落ち着く……！
そう思っていると、アネットが不思議そうな表情を浮かべているのに気付く。
顔は、キールとアリスの方を向いている。
「お姉さま、こちらの方々は？」
「えっと、後でちゃんと説明するんだけど……この二人とレオン先輩とでお店を作ることになったんだ」
「つまりこちらの方々は、お姉さまのお店で雇われる商人の方なのですね」
アネットは私から離れて、二人の前に歩いていく。
「初めまして。私、アルベルト公爵家当主フレル・アルベルト・イヴェールの長女、アネット・アルベルト・イヴェールと申します。此度は姉の出店に協力していただけるとのこと、感謝いたします」
アネットはスカートを両手で摘まみながら、丁寧な挨拶をした。
どうやら、キールとアリスをどこかの大商人の子供だと勘違いしているらしい。
「お、俺たちなんかにそんな言葉は……えっと……」

キールがなんとか返そうとするが、どういう言葉を使えばいいのかわからないようだ。
なんか顔も赤くなっているし……もしかしてちょっと照れてる？
私が代わりに説明しようと口を開きかけたその時、ママがパンと手を打つ。
「まぁとにかく中に入りましょう。レオンも上がっていってちょうだい」
ママは言うが早いか、馬車を使用人さんに任せて屋敷の方へ。
まぁ確かに立ち話もなんだもんね。
そう思いながらみんなで移動する。
すると、キールとアリスは屋敷の豪華さに当てられて、壊れた人形のようにぎくしゃくとしか歩けなくなってしまった。
これから何度もここに来ることになるだろうし、早く慣れてもらわないとね。

客室に着いて少しすると、メイドさん一同が紅茶とお菓子を出してくれた。
早速カップに口を付ける。
数日ぶりのクレールさんの紅茶……とても美味しい。
思わず感動してしまうけれど、そんな場合じゃなかった。
私は改めて二人をみんなに紹介する。
すると、アネットが驚いた顔をした。

「え？　それではお二人は商人の方ではなかったのですね⁉」
「俺たちはただの孤児だよ、サキ姉に助けられたな」
キールは居心地が悪そうにそう言った。
敬語にはまだ慣れていないらしく、ぶっきらぼうな物言いだったけど、アネットは気分を害した様子もなくあっけらかんと返す。
「そうだったのですね！　でも、これからお姉さまのお店で働いていただけるということであれば、大した違いはありませんわ」
「そう……なのか？」
キールは自分の中の貴族像と目の前のアネットの反応がかなり違うことに、困惑しているみたい。
私はそんな二人のやり取りを微笑ましく見つつ、収納空間から柑橘系の果物であるオラジを使ったパンやらケーキやらを取り出し、テーブルに広げる。
オラジは、旅行で訪れたフォルジュの名産品なのだ。
「これ、みんなに買ってきたお土産」
「あら、たくさん買ってきたのね」
「わぁ、どれも美味しそうですわ！」
ママとアネットは大喜びだ。

あれ、そういえば――
「フランは？」
「フランなら『今日はみんなで特訓する日だから』って学園に行ったわよ」
ママの言葉に、私は驚きの声を上げる。
「え⁉　そんな話、聞いてない！」
「旅行から帰ってきたばかりだし、疲れてるだろうからって、気を利かせてくれたんじゃない？」
「もう、そんなのいいのに！　そうだ、今から私たちも学園に行こう！　キールとアリスを紹介しないと」
私がキールとアリスの方を向いてそう言うのを見て、アネットが手を挙げる。
「それなら私も行きますわ！　お兄さまやアニエさまがどんな練習をしてらっしゃるのか、見てみたいです！」
「あらあら……それはいいけど、このお土産はどうするの？」
「これに入れておけば大丈夫！」
私は収納空間からあるものを取り出した。
「これは？」
「これは私のお店で出す予定の商品――時間停止型食料保管庫の試作品なんだ」

そう、これは私の発明品の一つ。
この世界には家電製品がないため、食料を長時間保存できない。
だけど、この時間停止型食料保管庫があれば大丈夫。
見た目はほとんど前世の冷蔵庫と同じなんだけど、ドアを閉めると保管庫内の時間が止まり、中に入っているものが劣化しなくなるのだ。
とはいえ、一回聞いただけで理解することなんてできるわけもなく、ママは首を傾げる。
「じか……何？」
「この中に食べ物を入れておけば、ずっと入れた時のままの状態を保てるの」
私の言葉に対して、ママはちょっと反応に困っているような感じ。
でも少ししてどうにか理解したらしく、笑みを浮かべて褒めてくれる。
「そ、そうね！　これが広まれば食料問題なんかも解決できるかもしれないわ」
「うん！」
そう返事してから時間停止型食料保管庫に食料をしまっていると、アネットが私の袖を引く。
「お姉さま、早く行きましょう！」
「うん！　……あ、待ってアネット。レオン先輩はどうします？」
それに答えたのは、レオン先輩じゃなくてママだった。

「ごめんね、レオンには話したいことがあるの。だから、サキちゃんたちだけで行っておいで」
話ってなんだろう……？
そう思いつつも、私は頷く。
「わかった。レオン先輩、また馬を借りてもいいですか？」
「構わないよ」
「ありがとうございます。アネット、キール、アリス、行こう」
「はいですの！」
「あ、うん！　し、失礼します」
「失礼します……」
キールとアリスもママにぎこちなくお辞儀してから、先に部屋を出た私とアネットの後をついて部屋を出る。
それから私たちは小型馬車に乗り、四人で学園に向かう。
御者台に座るのは、当然キール。
旅行の道すがら、レオン先輩から手解きを受けていたんだけど、もう普通に馬車を扱えるようになっているね。

あっという間に学園にたどり着いた。
学園の門の前で見張りをしている人に、キールとアリスも入っていいか聞く。
二人が入れるかは少し心配だったんだけど、アルベルト家の長女と養子の頼みだからってことであっさりと通してくれた。
それから馬車を置き場に止めて、馬を預けてから訓練場へと向かう。
キールとアリスは学園に通ったことがないので、物珍しそうに周囲をキョロキョロと眺めながらついてきた。
訓練場の近くまで来ると、見知った声が聞こえてくる。
「ちょ、ちょっと待つっすよ！」
「敵は待ってはくれませんよぉ！」
「そうよ！　訓練だからって甘えないの！」
「ほらほら、足がもたついてるよ？」
慌てたようなオージェの声に次いで、ミシャちゃん、アニエちゃん、フランの声。
訓練場を覗くと、案の定オージェがみんなから総攻撃を受けていた。
たぶん多数の敵に襲われた時の訓練なんだろうけど、アネットとアリスとキールはそれを見て怖がってしまった。
「お、お姉さまの学年ではこんなにも激しい特訓が行われているのですね」

「お兄ちゃん……王都って怖いね……」
「あぁ……俺もやっていけるか不安になってきた」
あぁ、これは早く誤解を解かないと……。
そのためには、とにかくみんなの特訓を終わらせないとね。
「三人ともちょっと待っててね」
三人が頷くのを見て、私は訓練中の四人の方へと駆け出す。
「【飛脚】」
足に魔力を集めて速度を上げ、一気にオージェに近づく。
射程に入ったタイミングでオージェは私に気付いたみたいで、驚きの表情を浮かべた。
「サ、サキ――」
「ネル流……【陽ノ型・陽炎】」
「グヘェ！」
陽炎は相手の後ろに一瞬で回り、両手で掌打を放つ技。
オージェは私の技を食らい、変な声を出して倒れた。
みんなが唖然としている。
そんな中で口を開いたのは、フランだった。
「サキ、どうしてここに？」

「むー……私を仲間外れにするなんてずるーい」
私が不貞腐れたふりをすると、アニエちゃんとミシャちゃんが慌てて弁解する。
「あ、違うのよサキ。別に仲間外れにしようとしたんじゃなくてね！」
「そうですよ！　サキちゃんとはずっと特訓していたいし、一緒にいたいです！」
そんな二人がおかしくて、私はつい笑ってしまった。
「冗談だよ。気を利かせてくれたんだってママから聞いたし。私は全然気にしていないよ！」
そう言って二人に微笑んでいると、後ろから声がする。
「そんなことより……俺を心配してくれないんすね……」
振り返ると、オージェが背中を擦りながら起き上がるところだった。
前までなら、しばらくはぐったり倒れていたけど……うん、特訓のおかげで日に日に丈夫になってきているんだね。感心、感心。
「ごめんごめん。特訓を止めるにはああするのが一番いいかなって思って。一応加減はしたよ？」
オージェが『本当っすか……？』みたいな視線を送ってきているが、無視しつつ話を続ける。
「そうそう、みんなに紹介したい子たちがいるの。入っておいで」

私が呼ぶと、アネット、それからキールとアリスが入ってくる。
「えっと、アネットと……誰だい？」
「レオン先輩と旅行に行ってる時に出会った子たち。今度私が開くお店で働いてもらうんだぁ」
そう告げると、みんなが『え、お店ってなんの話？』って顔をする。
そっか、そのことも説明しなきゃだよね。
こうして私がさらっとお店を開くことについて説明したんだけど、意外なことに、みんなはすんなり受け入れてくれた。
っていうより『サキならしょうがないよね』って感じのリアクションだった。なんだか釈然としない……。
とはいえ、そこでごねるのもなんなので、私はキールとアリスに自己紹介するように促す。
「さ、二人とも」
「キール・シャンスです……」
「妹のアリスです……」
緊張している二人に対して、アニエちゃんは少ししゃがんで目線を合わせてから、にっこりと笑った。

「初めまして、私はアニエス。サキの友達よ。みんなからはアニエって呼ばれているわ。何か困ったことがあったら相談に乗るからね」
そんなアニエちゃんの言葉に対しても、キールとアリスはガチガチだ。
「は、はい！」
「よろしくお願いします！」
「ふふふ……そんなに緊張しなくても大丈夫よ」
そう言ってアニエちゃんは微笑んだ。
そんな彼女に続いて、他のみんなも自己紹介する。
「私はミシャです。二人とも可愛いですね。ぜひ私にコーディネートさせてください！」
「僕はフラン。アネットとサキの兄だよ。これからよろしくね」
「俺はオージェっす！　二人とも何かあったら助けてやるっすよ！」
オージェの言葉を聞いて、私を含めたチームメンバー三人が噴き出した。
口を尖らせてオージェは言う。
「な、なんすか！」
「俺が助けてやるって、あんた、そんな兄貴分キャラじゃないでしょ！　何をしてあげるのかしら？」
ニヤッと笑いながら言うアニエちゃんに対して、オージェはぐぬぬってなっている。

「そ、それは……俺だっていろいろできるっすよ！」
「ふふふ……それじゃあキール、アリス、何か困ったことがあったら、まずはオージェのところに行こうね」
私が言うと、オージェは胸をどんと叩いた。
「お、おう！　任せとくっすよ！」
それからしばらくみんなでお話をした。
最初こそ緊張していたキールとアリスだったけど、段々と普通に話せるようになっていく。
うん、仲良くなれたみたいでよかった。
特に、キールとオージェは通じ合うところがあるみたい。
夕方になったので私たちは別れ、馬車で家へと戻ることに。
これからの日々はもっと楽しくなるんだろうなーって思いながら、窓の外を見るのだった。

2　姫の元へ

あっという間に時は過ぎ、長期休暇も残り一週間を残すのみとなった。
ここ最近はキールとアリスも、私が王様に作ってもらった研究所内の実験場でみんなと簡単な体術の訓練に交じったり勉強したりしている。
もうすっかり仲良しだ。
「ここはこういう意味で……」
「あ、そっかぁ」
ミシャちゃんが教科書を指差しながら言うと、アリスは嬉しそうにはにかんだ。
その横では、キールがオージェに勉強を教わっている。
「オージェ兄、ここはどういう意味なんだ？」
「こ、ここはっすねぇ」
私やアニエちゃんやフランとも仲がいいけど、貴族だからか、少しまだ気後れしているみたい。
その点、平民のオージェとミシャちゃんの方が親しみやすいようだ。

ミシャちゃんはともかく、オージェが勉強を教えている様子はなんだか面白い。
キールとオージェが一緒にうーんって唸りながら悩む姿は、ちょっと兄弟みたいで微笑ましいし。
そんな風に考えていると、ちょうど今日やる分の課題が終わったらしく、キールとアリスが教科書を閉じた。
ミシャちゃんとオージェは、二人に教えるために資料室の書棚から取った本を戻しにいく。
私はそれを見つつ、キールとアリスに言う。
「さてと、次は魔法の練習だよ」
「「はーい」」
二人は声を揃えて返事をしてから、私の前に並んだ。
実は、今日から二人にも魔法を覚えてもらうことになったのだ。
ネル曰く、『魔石工学の特訓は魔法を練習するのが一番効率がいい』のだそう。
魔石工学とは、魔法陣などを使って魔石のいろんな使い方を研究する学問のこと。
これから作るお店の商品の開発には魔石工学の知識を使うから、勉強しておいてもらわないとね。
「そういえば二人の魔力って、なんの属性なの？」

横に立っているアニエちゃんに聞かれて、私はハッとする。
そういえばまだ二人の魔力属性、知らないじゃん。
私は収納空間からある道具を取り出した。
「それは？」
少しだけ胸を張って、アニエちゃんの質問に答える。
「これは私が作った魔力判別水晶だよ。これに魔力を込めると、色が変わるの。その色によってなんの属性を持っているかわかるんだよ。炎なら赤、水なら青みたいに」
この世界には炎、水、風、雷、土、草、光、闇、空間、治癒、特殊っていう十一種類の魔法属性がある。しかも魔法は、繰り返し使用して経験を積むことでスキル化させたり、発動過程を簡略化させたり、オリジナルの魔法を生み出したりと、応用も利く。
スキル化した魔法は、強さや難しさによって第一から第十まであるナンバーズに分類され、どのランクの魔法も一度発動できればその後はずっと使えるのだ。
それだけでなく、魔法の飛距離を伸ばす【ア】、速度を速くする【ベ】、効果時間を延ばす【セ】、操作性を高める【デ】といったワーズや、魔法に複数の属性を付与するエンチャントなどと組み合わせてさらに強化できるの。
とはいえ属性ごとに向き不向きがあるから、一般的には生まれつき魔法が得意だと言われている貴族ですら、多くて五、六種類の属性しか使えないんだけどね。もっとも、私はナーティ様の計らいで生まれつき全ての属性への適性があるわけだけど。

そしてこの道具は、どの属性の魔法に向いているのかがわかっちゃう優れモノ。
「へぇ、試しにやってみていいですか？」
アニエちゃんの後ろからひょこっと顔を出しつつ、ミシャちゃんが言った。
本は返し終えたらしく、その後ろにはオージェもいる。
「うん、いいよ」
私の返事を聞いて、ミシャちゃんは水晶に手を置いた。
「これでいいですか？」
「うん、その状態で魔力を注いで」
ミシャちゃんが魔力を込めると、透明だった水晶の中に青色と淡い黄色の光が浮かび上がった。
「私は水と光属性を持っているから、青色と淡い黄色に光ったんですね」
そう言いながらミシャちゃんが水晶から手を離すと、光が消えた。
「さ、二人とも」
私が水晶をキールとアリスに差し出すと、二人とも困ったように首を捻る。
「魔力って、どうやって流すんだ？」
キールに言われて「あっ」と声を上げてしまった。

そうだ、二人とも魔法について何も知らないのだ。
「それじゃあ、魔力の注ぎ方から教えてあげる」
私はミシャちゃんに水晶を預けて、二人の手を握る。
初めてネルに魔力の流し方を教えてもらった時のように……優しく……。
二人にその流れを感じてもらえるように、ゆっくりと魔力を込めた。
すると、キールとアリスが驚いたように言う。
「あ、なんかあったかくなってきたぞ」
「うん、お姉ちゃんの手からあったかいのが流れてきてる……？」
私は微笑んだ。
「このあったかいのが魔力だよ。二人の中にも流れてるから意識してみて」
「本当に俺の中を流れてるんだな……」
「うん……今まで苦しくて怖かったけど、今は違う。これが私の魔力……」
アリスは自分の中を流れる膨大な魔力を制御できずによく体調を崩していたけど、怯えがなくなっているようでよかった。
安心しながら、私はさらに教える。
「そう。それを、手に集めて……この水晶に触るんだよ。それじゃあ、キールから」
「お、おう」

キールは緊張した面持ちで、ミシャちゃんの持つ水晶に手を当てた。
すると、水晶の中には茶色と濃い緑色の光が浮かぶ。
「キールの属性は土と草だね」
私がそう伝えると、キールは渋面を作る。
「んー、土と草かぁ……」
「どうかしたの？」
アニエちゃんが尋ねると、キールは少し悔しそうに答える。
「いや、なんか土と草って地味じゃないか？　俺もオージェ兄みたいに電気をバリバリって出したかったぜ……」
「へへっ」
鼻を高くするオージェを横目に見ながら、アニエちゃんは言う。
「あら、そんなことないわよ。土と草の魔法も力強くていいじゃない。あとオージェ、何照れてんのよ。ムカつくわね」
「ひでーっす!?」
オージェはしょぼんと肩を落としたけど、まぁいつものことだし、すぐ復活するだろう。
それより次は――
「さ、アリスもやってみよっか」

「う、うん！」
アリスは緊張半分、期待半分といった様子で水晶に触れる。
「こ、これで魔力を集中……集中……」
「ア、アリス……？」
私が声をかけても、相当集中しているらしく、アリスは呟き続ける。
「これを全部……注ぐ！」
アリスが魔力を注ぐと赤、青、緑、淡い黄色――四色の光が溢れ、やがて水晶にヒビが入った。
四種類の属性を持っているなんてすごい！　けど、それより――
「アリス！　魔力を止めて！」
「え？」
言うのが少し遅かったらしく、水晶はパキン！　という音を立てて砕けた。
しばらくの間、みんなが沈黙する。
平民なのに四つもの属性を持っていること、そして何より水晶が壊れるほどの魔力量を持っていることに絶句してしまったのだ。
そんな中、アリスの顔だけがどんどん青ざめていく。
「ご、ごめんなさいぃ……」

それからは泣きそうなアリスを宥めて、今日は魔力コントロールの練習だけにしようってことになった。
まぁ、魔法の練習はゆっくりやっていけばいいよね。

そんなこんなでそれからは、勉強やら魔法の練習やらお店の準備やらで瞬く間に時が過ぎていった。
そして気付けば、新学期開始まであと三日。
今日は学園が始まる前に新しい服を何着か作っておきたいということで、ママとフランとアネットと共にドルテオの洋服屋さん巡りをした。
採寸は事前に済ませていたので、サイズが合っているのかを確認するだけだったけど。
最近、スカートが少し短くなったかな？　とは思っていたので、新しい服が増えるのはありがたい。
でも、いろんな服を試着しまくるのはやっぱり疲れる。
「ふぅ……やっと終わったね」
「そうだねぇ……」
思わずそう漏らすフランと私に、アネットが声をかけてくれる。
「お兄さまもお姉さまも、お疲れですわね」

「何着も洋服を着たり脱いだりするのは大変だよ……」
「うん、本当にね……」
疲れの一番の原因――試着の回数が増えた原因は、ママだった。
私たちが新しい服を見るたびに褒めてくれるのはいいんだけど、ママはここをもっとこうしてほしいなどお店に要望を出すのだ。
それによって何度も何度も試着するハメになってしまった。
当の本人は「それじゃあ私はお洋服を持って先に帰るわ！　フランたちはお友達と約束があるんでしょ？」と残して、もう帰ってしまったけれど。
気遣い自体はありがたいし、本当にいいママなんだけど、それとこの疲れとは別の話だ。
そう思っていると、アネットは楽しそうにその場でくるりと回る。
「アネットは好きですわ。新しい服をたくさん着られるのは、とても楽しいですもの」
服が好きなアネットは、むしろママと一緒に服に対する要望を出していたもんね……すごいよ。
アネットが私に言う。
「お姉さまはもっと服に関心を持ってくださいまし。お姉さまがオシャレに目覚めれば、レオン様でもオージェさんでも、世の男性はイチコロですわ！」
イチコロって……どこでそんな言葉を覚えてくるんだか……。

「そうかなー」なんて言いながら適当に流していると、フランが伸びをする。
「さてと、サキ。それじゃあ行こうか」
「うん」
「今日も研究所ですの？　アネットも行っていいですか？」
首を傾げるアネット。
私は顎に手を当てて考える。
「うーん……いいけど、私は別の用事があるから一緒にいられないよ？」
「お姉さまはどこに行かれるのですか？」
「うん。アリスと一緒に行かなきゃいけないところがあって」
アネットは少し残念そうな顔をしたが、すぐにニコッと笑った。
「そうなんですの……では、皆さまに鍛えていただきます！」
アネットももう三学年だもんね……成長したなぁ。
昔は私が向かう先に、絶対ついてきたがっていたのに。
そんなことを思いながら、私たち三人は止めてあった馬車に乗る。
馬車が走り出したタイミングで、アネットは先ほどの話の続きをする。
「アネットはもっともっと強くならなくてはいけないな、と常々感じているのです！だって今年を逃してしまうと、お姉さまと一緒に代表戦に出られるのは来年になってしま

いますの！」

そう言ってふんっ！　と気合を入れるアネット。

私はそれを微笑ましく見ながら言う。

「アネットは同学年の中じゃ十分強いんじゃないの？」

「いいえ、まだまだですわ。まだリックと模擬戦をすると十回中三回は負けてしまいますの。お姉さまとレガールさまに教えていただいているのに……」

そう言ってしゅん……とするアネット。

レガール様は、レオン先輩のお兄さんだ。剣術の指南を求める生徒が殺到するほど剣の扱いに長けている彼に教わっているのは確かに贅沢だけれど、それにしたって意識が高い。

同い年とはいえ、公爵家の子息のリック様相手に勝率七割あってもまだ満足しないなんて末恐ろしいよ……。

「でも、十回中七回は勝っているんでしょ？」

「いけませんわ！　常に勝てなければ！　そうでなければ学園最強のお姉さまとレガール様の顔に泥を塗ることになってしまいますの！」

「そ、そんな大袈裟な……」

「アニエさまとお兄さまはお姉さまのご指導を受けてから、自分のチームの方以外には負けてないと聞いておりますから」

まぁそれはそうだけど、二人ともが公爵家の血を引いている上に元々成績優秀だったこともあると思う。

ともかく、アネットにはプレッシャーを感じずに強くなってほしいんだけどな……。

私はそういう思いを伝えるべく、アネットを抱き寄せて頭を撫でた。

「アネット、あんまり思い詰めちゃダメだよ。アネットは十分強くなってるし、まだ卒業まで時間はたっぷりあるんだからね」

アネットは聞いているのかいないのか、私の胸に顔を埋めて抱きついてくる。

成長したとはいっても、まだまだ甘えたい盛りなんだなと思うと、とても可愛らしい。

前を見ると、向かいに座るフランがふふっと笑った。

「フラン、私、変なことした……？」

私が聞くと、フランは首を横に振る。

「いや、サキも姉らしくなってきたなって思っただけだよ」

お姉ちゃんらしい、かぁ……ちょっと照れくさいけど、嬉しいかも。

そう思っていると、フランは続ける。

「ついでにもう少し妹らしくしてくれたら、僕も嬉しいんだけどな」

フランは私と同い年だけど誕生日が早いから、一応私のお兄ちゃんではある。

だけど……。

私はそっぽを向いた。
「知らない。いつも意地悪なお兄ちゃんに出す妹感はないんだよ～」
「お姉さまの言う通りです！」
アネットまで賛同するのを見て、フランは後頭部を掻く。
「それはひどいなぁ」
私たち三人は、顔を見合わせて笑った。

数分後、馬車は研究所に到着した。
私たちが研究所内の実験場に着くと、入口の近くに立っていたアニエちゃんがこちらに気付いて声をかけてくる。
「あら、やっと来た。洋服選び、今年も時間かかったわね」
フランはその言葉に、やはりげんなりした感じで答える。
「本当に。年々長くなっているように感じるよ」
「お疲れ様。そして今日はアネットちゃんも一緒なのね」
「はい！　皆さまにいろいろ教えていただきたいのですわ！」
「ええ、大歓迎よ！　でも、サキはこれから王城へ行くのよね？」
「うん。だからアネットの訓練はみんなにお願いしちゃってもいい？　……ところであの

二人は何をやっているの？」
私が指差した先では、オージェとキールが体術戦を行っている。
しかもオージェが明らかに防戦一方だ。
アニエちゃんが呆れたように言う。
「あぁ、あれね。オージェが『キール！　男なら魔法だけじゃなくて体術も強くないとダメっすよ！』とかなんとか言い出して、模擬試合を始めたのよ。そしたら、キールってば意外といい動きするのね。あ、今の動きなんてサキそっくりじゃない？」
そういうことだったのね。
あぁ……あれは、キールが武術でも真似が得意なのか試したくて、私が教えたネル流武術だ……。
ごめん、オージェ。たぶんその子、通常技より一段上の技である結や奥義は習得していないけど、ほとんどの技を使えるようになってるんだ。
「キールの体術があんなに優れているなんて知りませんでしたわ！　ぜひ私とも特訓を！」
そう言ってアネットはキールとオージェのところに走っていった。
私はその小さな背中を見送りながら、アニエちゃんに聞く。
「そうだ、アリスは？」
「あぁ、アリスならたぶんミシャと一緒に被服室にいると思うわよ」

「ありがとう！　行ってみるね！」

実験場を出て被服室へ。

中に入ってみると、まず近くの机の上に並んだたくさんの服が目に入る。

これ、もしかして全部着せたの……？

奥へ視線を向けると、おそらくミシャちゃんが作ったであろう服を着たアリスと、息を荒くしてアリスにカメラを向けているミシャちゃんがいた。

「これもいいですね！　あぁ、でもこっちも捨てがたいです！」

「ミ、ミシャお姉ちゃん……私、疲れたよぉ……」

あぁ……アリスの気持ち、痛いほどわかるよ。

以前ミシャちゃんと協力して作ったうさ耳パーカーを着た時も、こんな風に撮影大会が始まったから。

しみじみしていると、私に気付いたアリスがこちらに走ってきた。

「サキお姉ちゃん、お帰りなさい！」

「うん、ただいま。アリス、可愛い服着てるね」

アリスが着ているのは青色の生地に白のレースをあしらったドレス。

不思議の国のアリスのドレスを、もっと洗練させたような服だ。

最近王都へやってきたばかりだし、まさしく『不思議の国から来た女の子』って感じだなって思って噴き出しそうになる。

「ミシャお姉ちゃんが作ってくれたの！　でも、たくさん服を着たら疲れちゃった」

私は眉根を寄せるアリスの頭を撫でる。

「あぁ……私も気持ちはわかるよ……」

そんなタイミングで、机の上を片付けたミシャちゃんもこちらへやってくる。

「サキちゃん！　ちょうどよかったです！　サキちゃんにも着てほしい服が――」

「今日は疲れちゃったから……また今度ね！」

「えぇ～」

さすがにここでも服を何度も着替えるのは嫌だ……。

それにこの後に約束もあるし。

あ、そうだ。服と言えば……。

「ミシャちゃん、前に頼んでた服ってできてる？」

「あ、はい。それならここに」

そう言って、ミシャちゃんは机の横に置いてある鞄から白い服を取り出した。

すると、真っ先にアリスが声を上げる。

「これ！　サキお姉ちゃんと同じ服！　うさ耳天使！」

実はミシャちゃんに、アリス用のうさ耳パーカーを作ってもらっていたのだ。
別にうさ耳はいらなかったんだけど……。
アリスはミシャちゃんから受け取ったうさ耳パーカーを嬉しそうに抱きしめている。
「アリス、着てみて」
私の言葉に、アリスは勢いよく頷く。
「うん！」
そうしてパーカーを着たアリスはなんというか……不思議の国感がより増した気がする。
今度、時計の飾りも作ってみよ。
そんな話は置いておいて……実はこのパーカーには、私のものとは違うある仕掛けが施されている。
アリスはどうやらそれに気付いたようで、声を上げる。
「これ……」
「気付いた？」
私はこのパーカーの仕掛けについてアリスに説明する。
このパーカーには、私のものとは違い魔石が付いていない。
その代わり、袖を通すと着用者の魔力を少しずつ吸い、自動バリアを発動するようになっている。

つまりこれを着ている限りは、アリスの魔力が許容量を超えることはないし、その上で身を守ることもできるのだ。
そんな私の説明を聞いて、アリスはパッと笑顔になった。
「それじゃあこれを着ていたら――」
「うん。体質を気にせず、アリスもみんなと同じように過ごせるはずだよ」
「……！」
アリスの目にじわりと涙が浮かぶ。
「ありがとう……サキお姉ちゃん……ミシャお姉ちゃん」
すごく喜んでくれているみたいでよかった。
私とミシャちゃんは顔を見合わせて、笑った。
さて、洋服も無事渡せたことだし――
「それじゃあ、そろそろ行こうか！」
私がアリスの手を握って部屋を出ていこうとすると、私の肩をミシャちゃんがガシッと掴んだ。
「待ってください！　サキちゃんもうさ耳パーカーをぜひ着ていってください！」
「え？　いやいや、自動バリアは別にいらないんだけど……」
「アリスちゃんも、どうせならサキちゃんとお揃いの服を着たいですよね？」

「う、うん！　私、サキお姉ちゃんと一緒がいい！」
アリスが満面の笑みをこちらに向けてくるものだから、断るに断れなくなってしまう。
私は口を尖らせて「わ、わかったよ……もう」と言うしかなかった。

それからしばらくして、私とアリスは研究所を出た。
なぜ『しばらくして』なのか……それはミシャちゃんが興奮して私たちの写真を撮りまくったから。
……なんだかどっと疲れたよ。
ともあれ、なんとか研究所を出発してこれから向かう先は王城だ。
今日の用事、それは私が魔法を教えてあげたこの国のお姫様――プレシアにアリスを紹介することである。
「おっきぃ～……」
王城を前にして、アリスが呟いた。
確かに、初めて王城を目の前にするとそう思うよね。
アリスの手を握って、守衛さんのところへ向かう。
「こんにちは、アルベルト公爵家養子のサキ・アルベルト・アメミヤです」
「ああ、サキ様！　プレシア姫様が首を長くしてお待ちしておりますよ。そちらの方は？」

守衛さんは、私と手を繋いでいるアリスに目を向ける。
アリスは緊張しているようで、完全に固まっていた。
そんなアリスに代わって、私は言う。
「プレシアに会わせようと思って連れてきたんです。事前に王様に許可はいただいています」
「そうでしたか。ではどうぞ」
「ありがとうございます。さ、行こう。アリス」
私はカチコチのアリスの手を引っ張って王城の中に入った。
今日は晴れてるから、たぶんプレシアは中庭にいると思うんだけど……。
そう結論付けた私は、いったん中庭に向かうことにした。
ふとアリスの方を見ると、顔が青い。
「アリス、緊張してる？」
「緊張しちゃうよ……だって、これからお姫様に会うんでしょ？」
「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。アリスと同い年だし」
「そうかもしれないけどぉ……」
そんな風に話しながら廊下の角を折れたところで――バッタリ王妃様と会った。
私が王妃様に一礼すると、アリスもそれに合わせて、慌てて頭を下げる。

それを見た王妃様の口角が上がった。
「あらあら、王城に可愛いうさぎが二匹も迷い込んでいるようね」
「こんにちは、王妃様。この格好のことは触れないでください……」
私はそうお願いしてみたけど、華麗にスルーしつつ王妃様は言う。
「そっちの子うさぎちゃんは例のお店で働く子？」
「……はい。さ、アリス」
挨拶をするように促すと、アリスは頭をバッと上げる。
「は、初めまして！　ア、アリしゅ……」
緊張で早口になったアリスは、自己紹介を綺麗に噛んでしまう。
顔がかぁっと赤くなった。
それを見ていた王妃様はふふっと笑って、アリスの前にしゃがむ。
「王妃様！」
ドレスが地面について汚れてしまうことを気にしたのだろう。声を上げたお付きの女性に、王妃様は「よいのです」と声をかけてアリスを見つめる。
「緊張しなくても大丈夫ですよ。ゆっくりでいいから、あなたのお名前を教えてくれるかしら？」
「……アリス・シャンスです」

「そう、アリス。いい名前ね」
王妃様はもう一度優しい笑みをアリスに向けてから立ち上がり、私の方へ視線を移した。
「これからプレと会うのかしら？」
「はい。王妃様は聞いていないんですか？」
「えぇ、あの子ったらあなたを独り占めしたいみたいで、教えてくれないの。たぶんプレは中庭にいるわ。折角ですし、このまま私も一緒に行こうかしら」
「お仕事中ではないのですか？」
「一段落ついたところだから、少し休むくらい問題ないのですよ。さ、行きましょう」
まぁ、王様と違って王妃様は真面目な方だから大丈夫だよね。
そのまま私たちが中庭に向かうと、ソワソワした様子でお菓子が並んだテーブルの周りを歩くプレシアが目に入る。
先頭を歩いていた私に気付くと、ぱぁっと表情を明るくしたんだけど、その後ろに王妃様がいるのを見て固まった。
「ど、どうしてお母様がこちらに？」
プレシアは目を丸くして驚きながらも、なんとかそう口にした。
そんな娘に対して、王妃様はウィンクしてみせる。
「ちょうど廊下でサキと会ったの。今日はもう一人可愛らしい子がいることだし、とても

楽しそうだったのでついてきちゃいました」
「でも今日はお仕事が……」
「それなら午前中にほとんど終わったわ」
サラッと言ってるけど、結構すごいことなんじゃない？
王様があんな感じでも国のお仕事が成立しているのは、もしかして有能な王妃様のおかげ？
そんな風に驚いている私の横で、プレシアは複雑な表情を浮かべている。
王妃様に内緒で私と会いたかったっていう残念さ半分、黙っていたのがバレてしまった気まずさ半分って感じかな。
だが、そんな反応も慣れっこなのだろう、王妃様はテーブルの方を指差して言う。
「さ、いつまでも立ち話してないで座りましょうか」
席に着くと、控えていたメイドさんたちが紅茶を淹れて私たちの前に置いてくれた。
そんなタイミングで、王妃様が切り出す。
「プレとアリスは初対面でしょう？　プレ、自己紹介をしたらどうかしら？」
プレシアはその言葉に頷いて立ち上がると、アリスに向かって丁寧にお辞儀する。
「はじめまして。エルト国王、ヴァンヘイムの長女、プレシア・エルトリアス・ヴェイクウェルと申します」

プレシアは初めて私と会った時とは全然違う、王族に相応しい堂々とした態度で挨拶をした。そして顔を上げるとニコッと笑う。
私が魔法を教えてからというもの、プレシアはどんどん自分に自信をつけてるって王様も喜んでいた。そんな成長を目の前で見せてもらったような気持ちになり、笑みが零れてしまう。
そして、それを見たアリスも慌てて立ち上がって頭を下げる。
「は、はじめまして！　サキお姉ちゃんのお店で働かせてもらうことになったアリス・シャンスですっ！　よろしくお願いします！」
それに対して拍手してから、王妃様は言う。
「さて、自己紹介が済んだばかりで申し訳ないんだけど、二人でお喋りしていてくれるかしら？　私はサキに少しだけ話があります」
「「えっ!?」」
プレシアとアリス、息がぴったりだ。
戸惑う二人に、王妃様は続ける。
「二人には内緒の話なので、あちらのテーブルに移動してくれると助かるんだけど」
「うぅ～……わ、わかりました」
プレシアはやはり王妃様に逆らえないのか、悔しそうにしながらも離れたテーブルの方

に移動した。
まぁ内緒の話だと言われたら押し切ることもできないって感じか。
そしてアリスは、困ったような表情で私の方を見る。
「えっと、アリスもちょっとだけお願い」
私がそう言うと、アリスは危なっかしい足取りでゆっくりと向こうのテーブルに向かっていった。
きっとお姫様と二人でお喋りをするというシチュエーションに、だいぶ緊張しているのだろう。
……大丈夫かなぁ、アリス。
まぁ、プレシアは優しい子だから大丈夫だよね。
私と、あと回復魔法のことになるとちょっと夢中になっちゃうだけで……だけで……。
あぁ、どうしよう、ちょっと心配になってきたかも。
そんな風に考えていると、王妃様がおずおずと声を上げる。
「サキ、せっかくプレに会いに来てくれたのにごめんなさい」
「いいえ、気にしないでください。それで、話というのは？」
「あなたが始めようとしているお店についてです。何を売るのかは王やフレルから聞いています。大変興味深いですね」

「そ、そうでしょうか？」
「はい。現在、平民の中では、男が仕事に行って女は家事や育児を行い、貴族であれば、その家事育児をメイドや使用人に任せている……というのが通例です。しかし、あなたが売ろうとしている商品は家事による拘束時間を短くし、やがては労働力を増やすための足掛かりになるでしょう」
そんな大それたことを考えていたわけじゃなくて、ただアリスの力を活かしたかっただけなんだけど……。
ここまで褒められると、何も考えずにお店を出そうとしていた自分が恥ずかしい。
そう思っていると、王妃様は声を低める。
「しかしその反面で、よくない考えを持っている者もいます。あなたが作り出す商品を軍事利用したいという輩たちです」
「軍事利用……？」
「簡単に言うと、武器や防具、罠に兵器……そういったあれこれに、サキの生み出した技術を転用できるのではないか、と」
「確かに武器を作ることは可能ですが……この服だってその第一段階みたいなものですし」
私はそう言ってパーカーを少し引っ張ってみせた。

すると王妃様は驚いた顔をする。
「そんな可愛い服にさえ、何か仕組みがあるのですか？」
「はい。フードを被っていれば、第五級までの魔法を感知して自動でバリアが張られ、攻撃を防ぎます。しっかりテストしたことはないんですけど、第五級の魔法でも三回くらいまでなら受けても大丈夫じゃないかなって」
「そ、それは……凄まじいですね」
「そうですか？」
うーん、私としてはもうちょっと耐久性があればって思っているんだけど……。
首を傾げる私を見て、王妃様は少し困っている様子。
「あなたのお店の詳細を知る者は限られますし、具体的な商品の情報は公になっていないので、具体的にどう軍事利用するかまでは考えが及んでいないでしょう。ですが、どこで誰が見ているかわかりません。情報の管理や店員の安全管理は徹底した方がよいですよ」
「は、はい……」
王妃様に言われたことは寝耳に水もいいところだった。
だって、みんなの生活を豊かにしようと作り出した発明品が軍事利用されるだなんて、思いもしないもの。
私だけじゃ不安だし、今度レオン先輩と一緒に対策を考えよう。

そう眉間に皺を寄せながら考えていると、王妃様は声を明るくして「とはいえ」と切り出す。
「王も私も、あなたにはとても期待しているのです。これからもこの国の助けになってほしいと思っています。だからこそ、あなたという素敵な人材を邪な思いを持つ者のせいで失いたくありません。私たちもできる限り協力します」
この国のトップにそんな風に思われているなんて、光栄な反面ちょっとプレッシャーだ……。
私は背筋を伸ばして、頭を下げる。
「はい。ありがとうございます」
王妃様は優しく微笑んでから、立ち上がった。
残っている仕事を終わらせなければならないらしい。
優しい王妃様の期待に応えられるようにしっかり準備しようと決意を新たにしつつ、私はプレシアとアリスの待つテーブルの方へと足を向けた。

◆

私――アリスがプレシア姫様と一緒にテーブルを移ってから、一分くらいが経った。

いや、たぶん一分くらいじゃないかなって思うだけで、緊張のあまり正確な時間はわからないんだけど。

移動させられてから、プレシア姫様がサキお姉ちゃんと王妃様をあまりにも羨ましそうに見つめているものだから、私は話しかけるタイミングを見つけ出せない。

うう……初めて会うお姫様相手にどんな話題を選ぶべきかなんてわからないよぅ。

そんな風に考えて思わず俯きかけたタイミングで、お姫様の声が聞こえる。

「アリス様……でしたっけ？」

私は慌てて顔を上げて言う。

「わ、私なんかに様付けだなんて恐れ多いです！　呼び捨てにしていただいて大丈夫ですので！」

「何を言ってらっしゃるんですか。あなたは先生のお店で働かれるのですから、失礼な態度は取れません。それに、私とあなたは歳が同じだと聞いています」

「ですが……」

渋る私を見て、お姫様は思いついたような声を上げた。

「それではこうしましょう！　あなたには私のお友達になっていただきます。これからはお互い呼び捨てで、敬語もなし！」

「えぇ⁉」

私は思わず驚きの声を上げてしまった。

プレシア姫様が私を呼び捨てにするのは構わないが、私も呼び捨てにするのは失礼な気がしてしまう。

兵士の人に聞かれたら私、罪に問われるんじゃ……。

いろいろな考えが巡り、無言になる私を見て、お姫様はぷくーと頬を膨らませた。

「もう決めたの！　アリス！　あなたは私のお友達にならなくちゃダメ！」

「あ……」

お姫様に自分の名前が呼ばれた時、ふわっと体が宙に浮くような、そんな感覚に包まれた。

同い年の女の子に初めて名前を呼ばれちゃった！

……それどころか、年の近いお友達なんて今までいなかったもの。

メルブグではほとんど家の中にいたし、王都エルトでもサキお姉ちゃんのお友達としかお話ししていないし。

私は熱に浮かされたような心持ちで言う。

「ほっ、ほんとに私なんかでいいのでしょうか⁉」

元々孤児で、体も弱くて、魔法すらまだまともに使うこともできない私なんかが、お姫様とお友達？

とても嬉しくて、光栄なことだけど……私のせいでいつかお姫様に迷惑がかかってしまうかも……。

そんな私の暗い考えを払い除けるように、お姫様は身を乗り出して、私の手をぎゅっと握った。

「いいの！　それとも……私とお友達にはなりたくない？」

「そ、そんなことないです！　お姫様とお友達になれるなんて光栄です！」

「じゃあ、アリスも私のことを別の呼び方で呼んで！」

期待の眼差しを向けるお姫様が可愛くて少し照れ臭かったけど、私はゆっくりと口を開いた。

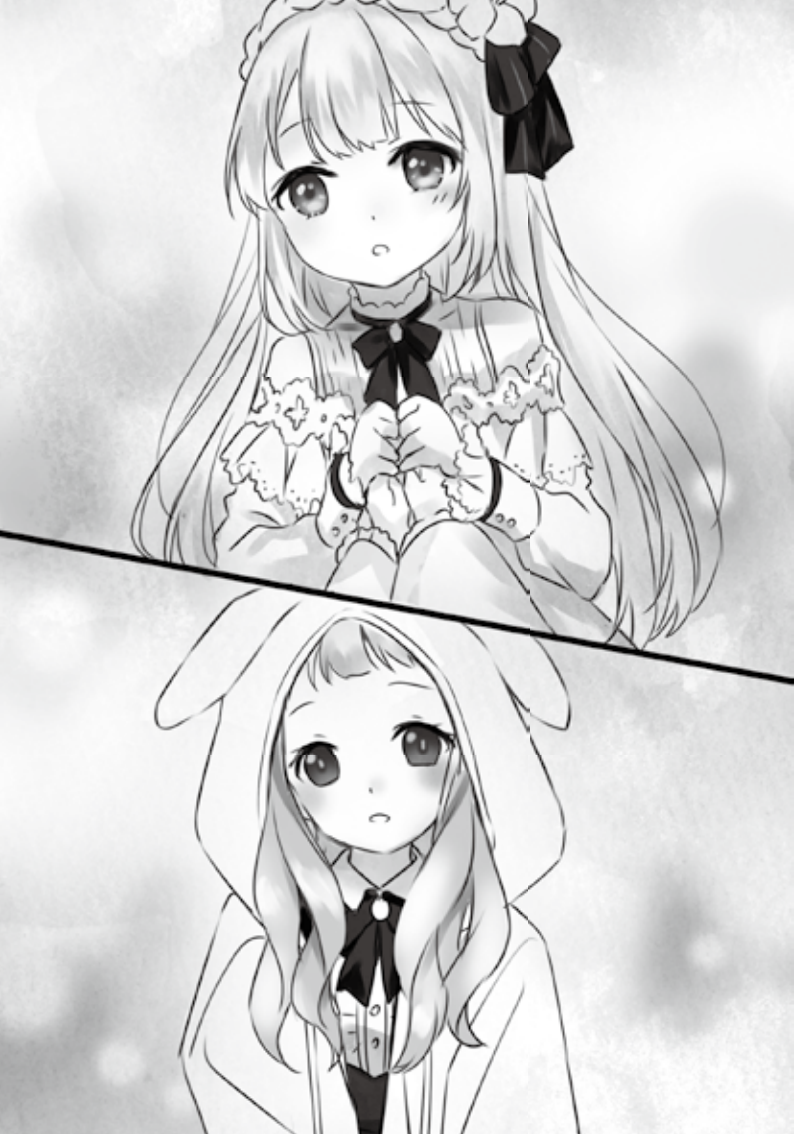
「プレシア……ちゃん」

結局呼び捨てにはできなかったけど、私の呼び方を気に入ってくれたのか、プレシアちゃんは笑ってくれた。

「うん、それでいいの！　あなたのことを教えて！　まずはその可愛らしい服から！　先生と同じものだよね？」

「あ、この服はね――」

それからプレシアちゃんにメルブグでのことを話したり、逆にプレシアちゃんとサキお姉ちゃんとのことを聞いたりした。



お互いにサキお姉ちゃんに助けられたこともあって、サキお姉ちゃんの話をするとすごく楽しかったし、盛り上がった。

しばらく話をしていると、王妃様との話が終わったようで、サキお姉ちゃんが私たちの方に合流してくる。

どうやら王妃様は仕事に戻ったらしい。

それからは三人で紅茶を片手にいろいろな話をした。

その時間はメルブグで暮らしている時には思いもしないくらいに素敵で、夢のようで……あっという間に過ぎ去ってしまった。

だけど、最後にまた会おうねって約束したんだぁ。

私は初めてお友達ができたことがすごく嬉しくて、帰り道でもサキお姉ちゃんにプレシアちゃんのことばかり話してしまった。

3　ギルドのひと悶着

いよいよ今日から新学期だ。

私――サキは五学年に進級した。

立ち読みサンプル
はここまで

代表戦でチームメイトだった学園の先輩であるラロック先輩と初めて会ったのが、確か彼が五学年の時だ。

それに追いついたと思うと、少し感慨深くもある。

「はぁい、皆さん。今年の皆さんの担任は先生でーす」

教室に入ってきた先生は、いつも通りののんびりした声で私たちに挨拶をしてから、出席を取る。

なんやかんや担任の先生はずっと変わらなかったし、アニエちゃんを始めとしたいつものメンバーも同じクラスのままだった。

「さて、皆さん。五学年からは魔力の使い方をより深く学んでいきます。中にはもう使える人もいるようですが、魔力操作がメインの内容ですよー。魔力操作は魔法使いの戦闘において攻撃、防御、回避と様々な場面で使える重要な技術です。それに加えて戦闘訓練もしっかり行うので頑張っていきましょうね！」

そんな先生の言葉と共に、授業は始まった。

あっという間に学校が終わった。

昨年から科目も増えたし、勉強も楽しくなりそうだ。

私は荷物をまとめつつ、アニエちゃんに聞く。